

破れた舟

—ヨハネス・クヌッセンのこと—

奨励	深見 祥弘〔ふかみ・よしひろ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団近江八幡教会牧師

その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。イエスは起き上がり、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

(マルコによる福音書 4章35—41節)

ヨハネス・クヌッセンのこと

今日はまず、一つの歌を紹介いたします。「君が名は 永遠に朽ちざり 国境を 越えて命を 救はむとせし」。これはデンマーク人ヨハネス・クヌッセン（1917—1957）の愛の業を歌ったものです。

今から55年前、1957年2月10日の夜、和歌山県日ノ御崎沖の紀伊水道を、デンマークの貨物船エレン・マースク号が神戸港に向けて航行中のことでした。徳島の小型船高砂丸が火災を起こし、二人の船員が助けを求めているのを発見したのです。その夜は北西の風が20メートルと強く、波も高い状況でした。

マースク号の船員たちは、すぐに救助用のボートを降ろして漕ぎ出しましたが、うねりと強い風に押し流されて、なかなか高砂丸に近づくことができませんでした。そのため彼らはボートでの救助をあきらめ、マースク号からロープを投げて船員を救助することになりました。この時、高砂丸には一人の船員の姿しか見ることができませんでした。マースク号からロープが投げられると、船員がそれをつかみました。彼はロープに身を委ねて冷たい嵐の海に入り、マースク号から降ろされた綱はしごまで導かれました。そして垂直のはしごを上り、あと少しというところで力尽き、再び海に落ちてしまったのです。

これを見た機関長ヨハネス・クヌッセンが、暗い海に飛び込みました。マースク号の船員たちは、日本の船員を脇に抱える彼の姿を見たのですが、二人はついに波に吞まれてしまいました。救助のためマースク号から再びボートが降ろされましたが、このボートも流されてしまいました。

翌日、日ノ御崎の北側・田杭海岸でクヌッセンの遺体と大きな裂け目のあるボートが発見されました。(和歌山県日高町「広報ひだか」2012年4月号より)

私の原点

なぜこのことをお話したかという、55年前のこの出来事が私の原点であるからです。

- この出来事は、私の故郷で起こったことです。私は日ノ御崎の南側の集落三尾に生まれました。母親の里は日ノ御崎の北側の集落田杭です。
- この出来事は、私の生まれる1カ月前に起こりました。私が生まれたのは1957年3月9日です。その後、紀伊水道を臨み見る灯台近くの公園に、クヌッセンの胸像と顕彰碑が完成し、遠足で公園を訪れると小学校の先生が彼の話をしてくれました。
- この出来事は、私と同じ信仰をもつクヌッセンの愛の業であることに気づかされたことです。
故郷を離れて生活するようになった私は、いつしかクヌッセンのことを忘れてしまっていました。時を経て、再び彼の名に出会った時、私はもう牧師として働きをしておりました。ある日「日本キリスト教歴史大辞典」（教文館）を開いて調べ物をしていた時、偶然彼の名を見いだしたのです。そこには、こう書かれていました。「翌日発見された遺体の懷中には、読み古されてボロボロになった小型聖書があった」。私が子どものころにクヌッセンについて聞いた話には、懷中の聖書のことはありませんでした。子どもの私には、彼が「すばらしい人」というイメージしかなかったのです。彼が聖書を胸のポケットに入れて持ち歩き、聖書の言葉に親しんでいたこと、そして、それを懷中に入れたまま海に入ったことを知ったとき、これまで私が抱いていた彼のイメージが、変えられる思いがいたしました。

嵐を静めるイエス

聖書には「舟にお乗りになったイエスが嵐を静める」という奇跡物語（マルコによる福音書4章35—41節）があります。

ガリラヤ湖の畔で群衆に教えをされたイエスは、夕方になると、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われました。弟子たちは舟にイエスをお乗せすると、湖の向こう岸、ゲラサ人の地方に向けて漕ぎ出しました。弟子たちの何人かは漁師です。「イエスさま、1日お働きになってお疲れになられたことでしょう。後は私たちに任せてくださって、お休みください」。弟子たちはこのように言って、舟を出したのではないのでしょうか。

日も落ちて、暗くなったころ、一行は激しい突風に襲われ、波をかぶったので、舟が沈みそうになりました。漁師である弟子たちでさえ、身の危険を感じるほどでした。けれども、イエスは艫（とも）の方で眠っておられました。弟子たちはイエスを起こし「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言いました。イエスは起き上がり、風を叱り、湖に向かって「黙れ。静まれ」と言われると、風は止み、凪になりました。弟子たちは「いったい、この方はどなたなのだろう」と互いに言いました。

クヌッセンの信仰

ヨハネス・クヌッセンは、この聖書の話をよく知っていたことでしょう。船乗りであった彼は、しばしば航海で嵐を経験していたに違いないからです。しかし彼は、たとえ嵐に襲われても、イエス・キリストが共にいてくださるなら必ず守られると信じていたのです。そして、彼は聖書によって、イエスがユダヤの人だけではなく、外国の人びとの救いのために十字架に架かれ、命を捨てられたことを知っていました。イエスが向かわれた「向こう岸」とはゲラサ人の地方、外国人の地であったのです。イエスの十字架は、時代や場所を超えて、今の時代を生きるクヌッセン自身の救いのためであることを知って、彼はイエスを救い主と信じました。クヌッセンは、このイエスの愛に促されたからこそ、日本の船員を助けようとすることができたのです。

考えてみれば、この出来事でマースク号の船員たちは日本の船員を一人も救うことができませんでした。加えてクヌッセンをも亡くしてしまいました。しかし、55年の時を経て、この愛の業が人びとに語り継がれています。

破れた舟に

イエスをお乗せして

この夏、母親の里を訪ねた時、マースク号の破れた舟を見に行きました。これまではコンクリートの保管庫に入れていたのですが、それがありません。「どうしたのだろう」と思っていたら、海のそばに立派な展示館が完成していて、敷地内には慰霊碑も作られていました。これまでは保管庫の窓越しに見ることしかできませんでした。館内ではじめて間近にそれを見ることができました。

私は、嵐のなか、イエスのお乗りになったこの舟が、大きな傷を負いながらクヌッセンをこの岸に運んだのではないかと、また、イエスのお乗りになった舟が、風も波も静まった凪のなか、クヌッセンを天国に導いたのではないのかと思いました。さらにこの破れた舟が、私の町の人びととデンマークのフレデリックスハーベン（クヌッセンの生まれた町）の人びとを現在も結んでいるのだと感じました。実際この二つの町では、55年の時を経た今も、互いに訪問し合うなどの交流が続けられています。

「破れた舟」とは、私たちの愛の姿を表すものです。私たち人間は破れや弱さをもっていますが、イエス・キリストがそこにおられるなら、イエスの愛を証しすることができるのです。私も破れた舟ではありますが、イエスをお乗せして、神と人、人と人をつなぎ、イエス・キリストの愛を証しすることに生涯用いられたと願っています。

展示館のボートのそばに、歌が掲示されていました。「君が名は 永遠に朽ちざり 国境を 越えて命を 救はむとせし」。歌の意味はこのようなことでしょうか。「ヨハネス・クヌッセンの名は、永遠に朽ちることはありません、国境を越えて、日本の船員の命を救おうとしたのですから」。しかし私は、彼のうちにあって働かれた御方のことであると読むことができました。

「イエス・キリストの名は、永遠に朽ちることはありません、国境を越えて、人々の命を救われたのですから」と。